

*The American Frugal Housewife*に於ける家事仕事の意義

Discovery of the significance of housework in *The American Frugal Housework*

西田 梨紗¹

¹大正大学人文学科

Risa Nishida¹

¹Graduate School of Literary Studies, Taisho University

3-20-1, Nishi-Sugamo, Toshima-ku, Tokyo, 170-8470 Japan

キーワード：アメリカ文学，女性，リディア・マリア・チャイルド，暮らし

Key words : American literature, Women, Lydia Maria Child, Livelihood

抄録

本研究は、リディア・マリア・チャイルドの*The American Frugal Housewife* (1829) では女性の家事仕事はどのように意義付けられているかを明らかにすることを目的としている。この本には、低価格で作れる料理のレシピや、不要な物を日用品に再利用する方法などが掲載されているように、主婦たちの暮らしに役立つ記述があふれている。加えて、堅実な暮らしは道徳とも結び付くことが教え説かれており、女性たちに高い精神性を教え説く記述も含まれている。

このような特徴をもつ*The American Frugal Housewife*であるが、19世紀半ばのアメリカでは女性のために執筆されたコンダクト・ブックは数多く流通していた。チャイルドは反奴隷制運動にも積極的にコミットしていたように家庭内のみならず社会もまた見据えていたが、彼女の執筆したコンダクト・ブックには、同時代に執筆されたこうした類の本とは異なる特徴や目新しさがみられるのではないかと期待できる。

考察の結果、チャイルドは*The American Frugal Housewife*を通して女性たちに節約の方法や儉しい暮らしと結び付けて道徳を教え説くばかりではなく、女性にとって家事は自らの身を建てる、換言すると社会で独立して生きていくためにも必要な術であると教え説くこともまた意図しているのではないかという解釈を導き出せた。チャイルドのこの本では、家事仕事が女性の自立や幸福とも結び付けられており、女性たちの幸福にもかかわるものとして家事が捉えられている点もまた着目に値する。

1. はじめに

チャイルド (Lydia Maria Child, 1802-1880) の *The American Frugal Housewife* (1829, 以下 *Frugal* とする) には日常生活で簡単に取り入れられる節約方法や安価な料理のレシピが書き留められている。当時の主婦にとって有益な情報が含まれている本だといえる。ここで、*Frugal* の作者であるチャイルドについて簡単にふれると、反奴隷制運動への尽力は現代においても着目されているし、数多くのオリジナリティに富んだ著作も研究対象として注目されている。彼女の代表作の1つには白人女性とインディアンの男性の結婚物語 *Hobomok* (1824)

がある。チャイルドは、このようなオリジナリティ溢れるフィクションを生み出しているが、家事のハウツー本ともいえる *Frugal* にも当時としてのなんらかの目新しさがみられるのではないかと期待できる。

19世紀半ばのアメリカで理想とされていた女性像は良き妻として、良き母としての姿である。男性が外で経済生産に携わるよう求められていた一方、女性には家の管理が求められていた。当時のコンダクト・ブックには良き妻、良き母となるために求められる美德を教授しようという目的があるが、チャイルドの女性たちにそれを教え説こうとする意図が *Frugal* から読み取れる。

本稿では、チャイルドが *Frugal* において女性の領域は家庭とされていた時代に、女性たちが家事を身に着けることは、女性自身の幸福にもかかわると考えていたのではないかという問いを軸に作品を解読していきたい。チャイルドが女性たちに実用的な節約方法や家事の方法に加えて、なにを教え説いたのかを導き出せたらと思う。

2. アメリカにおける女性たち

Frugal を考察する前に、植民地時代と独立戦争下における女性の社会的立場と役割をみたく、19 世紀前半から 19 世紀中頃の女性たちが社会からどのような役割を求められていたのかをみていきたい。植民地時代と独立戦争下に注目すると、アメリカの歴史上、女性の家庭内での仕事が 19 世紀とは異なる意味合いがあるとわかる。しかし、*Frugal* で意義付けられている家事には家族への道徳的献身に加えて、これら二つの時代と類似した見方がみられる。まず、植民地時代に属した女性に目を向けると、この時代の女性は男性から思想や言動が抑圧されていたことがわかる。女性が男性と対等に発言し、行動することによって社会から追放されることもあった。ハッチンソン (Anne Hutchinson, 1591-1643) は宗教的集会を開催したり、女性にも教育が必要だと主張したりしたために、共同体の上層部から目をつけられ追放された。また、ヒビズ (Ann Hibbins, 生年不明-1656) が家の修理を頼んだ大工との諍いが原因となって魔女裁判にかけられた事件が植民地時代の女性の立場を象徴している。

一方で、植民地時代と独立戦争下の経済状況のもとでは女性の役割は経済と結び付けられていた。植民地時代の経済は自給自足の農業経済であったために、家事を中心とした女性の労働が男性とほとんど等しく認められていた。この時代においても家事は単調で辛い作業ではあった。しかし、植民地時代の農業経済のもとでは男女の役割の違いがあったものの、女性にも生産者としての役割が認められていた。独立戦争下には、女性の針仕事はイギリス商品不買運動の下で、国の自由を獲得するという偉大な目的に通じていた。この時期、「ホーム」とは家庭と同時に「アメリカ」を意味し愛国心と結び付いていた (有賀 16-17) ^[1]。

それでは、19 世紀のアメリカにおける女性たち

がおかれていた状況についてみていきたい。19 世紀に入るとアメリカで産業革命が起こり、経済生産の中心が家庭から工場へと移行する。社会システムのこのような変化で、男性は家の外で仕事を行い、女性は家庭内で仕事を行うといったジェンダー・ロールが形成され、女性は経済生産の外におかれるようになる。女性に任された家庭内での役割は家事仕事のみならず、子どもの教育も含まれていた。有賀夏紀は、妻として母としての役割を任された女性たちが、社会から求められていた在るべき姿を的確に説明している。

家庭を精神浄化の場、安息の場にし、子供を立派に教育する仕事を委ねられた女性は、当然のことながらそれだけの人格を備えているものと考えられた。女性は、愛情豊かで頼りになり、信仰厚く、純潔で、温和で、慈悲深く、自己を犠牲にして他人に尽くすものとされた。そして、道徳と宗教の面では、女性は生まれながらにして男性よりも優れた特性を持つとされ、社会の純潔と信仰の守護者としての役割が期待されたのであった (有賀 42) ^[1]。

男たちの活動する仕事の世界に対立するプライベートな生活の場、金銭的な価値が支配する外的世界からの精神の避難所 (有賀 36) ^[1]として家庭が見做されるようになると、女性には献身的であり、道徳的であるように求められた。この期には国の将来を担う子どもの教育が任されるようになり、女子教育の必要性について考えられるようになる。19 世紀中頃に近づくにつれて、女子のための私塾や大学、及び男女共学の学校が創立されたのは、良妻賢母の育成を目的とするためである。しかし、1827 年にピーボディー (Elizabeth Peabody, 1804-1894) がヒストリカル・スクールを開き、1845 年にはフラー (Sarah Margaret Fuller Ossoli, 1810-1850) が *Woman in the Nineteenth Century* で女性が一人の個人として認められない社会を糾弾したように、女性たちが女性自身のために教育の必要性や一個人としての権利をしだいに主張するようになる。

本稿で 19 世紀半ばのアメリカの女性について考えるにあたって重要なのは、この時代にコンダクト・ブックが多く流通していたことだ。ジェーン・ローズはコンダクト・ブックの特徴を以下の

ように述べる。

The conduct book for women usually took one of two forms: a collection of essays, sermons, or letters, or a treatise of closely linked chapters covering conventional topics. Such subjects might include domestic, religious, and wifely duties; advice on health and fashion; rules for dating, mental improvement, and education; the art of conversation and avoidance of “evil-speaking” and gossiping; and advice on fostering harmonious marital relations (Rose 38-39) [2].

ローズが端的にコンダクト・ブックの特徴を述べているように、こうした種類の本には女性たちの生活や関心に深くかかわるテーマが扱われていた。後ほど詳しくみていくが、パークス (Frances Parkes, 生年没年不明) の *Domestic Duties or, Instructions to Young Married Ladies, on the Management of Their Households, and the Regulation of Their Conduct in the Various Relations and Duties of Married Life* (1828, 以下 *Domestic Duties* とする), 及びレズリー (Eliza Leslie, 1787-1858) の *Miss Leslie's Behaviour Book: A Guide and Manual for Ladies as Regards Their Conversation; Manners; Dress; with Full Instructions and Advice in Letter Writing* (1839, 以下 *Miss Leslie's Behaviour Book* とする) は *Frugal* と同時期に出版されたコンダクト・ブックである。

以下, *Frugal* に焦点を照らしていくが、まずはこの本がどのような位置付けをされていたのかについて考えていきたい。

The information conveyed is of a common kind; but it is such as the majority of young housekeepers do not possess, and such as they cannot obtain from cookery books. Books of this kind have usually been written for the wealthy; I have written for the poor! (Child, *Frugal* 6, 下線は引用者) [3]

上述の引用は“Introductory Chapter”に記されている。チャイルドは *Frugal* について裕福な主婦 (“wealthy”) というよりも、限られた収入で家の管理をしなければいけない主婦 (“poor”) が読者

対象であるとイントロダクションで述べる。あわせて, *Frugal* の中表紙の記述“Dedicated to Those Who are not Ashamed of Economy”に注目する。この意味を考えると、貧困に陥っている女性たちというよりもむしろ、節約を恥と捉える余裕のある経済状況におかれた主婦が、この本の主な対象読者だといえる。また、作中には人間の評価に装飾品は関係しないという記述がいくつかあり、ここからも上流の生活に憧れをもっているもの、かといって大きな額を自由にできない中間層の女性たちが主な読者対象ではないかと窺える。

キャロライン・カーチャーは *Frugal* がベストセラーになった理由について、当時、裕福な女性を対象にしたコンダクト・ブックはあったが、堅実で儉しい暮らしを営む主婦 (“poor”) やミドリングクラスの主婦を対象にしたこうした類の本はなく、そこに目をつけたのが *Frugal* の成功のポイントだと指摘している (Karcher 127-128) [4]。例えば、パークスやレズリーのコンダクト・ブックは裕福な女性に向けて執筆されているのは明らかだ。パークスの *Domestic Duties* にはミセス L (Mrs. L.) とミセス B (Mrs. B.) の対話形式で、ハウス・キーパーの管理方法について記されている (Parks 128-141) [5]。レズリーの *Miss Leslie's Behaviour Book* にはホテルでの食事マナー (Leslie 120-142) [6] や、相手を呼ぶ際の正しい敬称の選び方 (Leslie 52-65) [6] などといった上流の暮らしを明らかに意識した記述もある。レズリーやパークスのコンダクト・ブックは裕福な女性を対象に執筆されているのは明らかであり、限られた収入でやりくりしなければいけない女性にとって実用的な記述とはいえない。

続いて、出版当時における *Frugal* の位置付けに加えて、この本がロング・セラーになった社会的要因をみていきたい。まず、当時における *Frugal* の位置付けであるが、1839年8月21日の *The North Carolina Standard* に掲載された広告が重要な資料となる。この広告の“Valuable Family Books. —Turner & Hughes have on hand some of the Best Books for House-Keepers, that have ever been Published, viz: House-Keeper's Manual” [7] と題された著書リストに *Frugal* が含まれている。この本と並んでいる本は *American Cookery, Seventy-five Receipts, Virginia Housewife, The Art of Dining*, 及び *The American Flower Garden Directory* などであ

る。この著書リストには、レシピ本や家事のハウツー本ではないかと窺えるタイトルの本が掲載されている。*Frugal* には多くのレシピが掲載されているが、この本もレシピ本、ならびに家事のハウツー本として読者から重宝されていたといえる。

Frugal が人気を維持した背景には、1837年から1839年にかけてアメリカが陥った大不況も関係する。この不況により、産業の発展は止まらなかったものの、多くの人たちが経済的に困窮した。ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) がハーバード大学を卒業した年は1837年であったが、この年に大学を卒業した若者たちは就職口に困った。*Frugal* に記されている実用的節約方法は、多くの主婦たちのニーズに応えたに違いない。

長年にわたって人気を博した *Frugal* であるが、カーチャーによると、ビーチャー (Catharine Esther Beecher, 1800-1878) の *Treatise on Domestic Economy* (1841) が *Frugal* の売れ行きを悪くした原因の一つらしい。*Treatise on Domestic Economy* が出版された1842年に *Frugal* は28版を出版したものの、ビーチャーによるこの本が *Frugal* よりも近代的であったために、この時期から *Frugal* の売れ行きが悪くなる (Karcher 131) ^[4]。

ここまでみてきたように、チャイルドは当時の中流の女性たちを対象にして *Frugal* を執筆し、多くの部数が売れた。以下、この本についてより詳細に検討していきたい。

3. 社会を見据えて：実用的節約方法と道徳的教訓

Frugal には本のタイトルに相応しく、多くの節約方法が織り込まれている。買いだめをしない (Child, *Frugal* 17) ^[3]、レモンシロップを購入するよりも自分で作る方が安い (Child, *Frugal* 20) ^[3]、オイル瓶に巻いてあるラベルをつなぎあわせてテーブルマットを縫い繕う (Child, *Frugal* 10) ^[3] などといった節約方法に加え、一般的に嫌われている安価な肉の部位を美味しく食べるためのレシピ (Child, *Frugal* 43-46) ^[3] なども織り込まれている。チャイルドは実用的節約方法を *Frugal* に書き記すだけでなく、浪費が人を墮落させ、人間の評価は外見を着飾っても上げることができないといったように儉しい暮らしが美德と結び付くという主張を繰り返している。

チャイルドはパークスやレズリーと違い、社会問題に関心を向けていた。そのことは、チャイルドが反奴隷制運動に尽力する姿勢にも表れている。チャイルドの道徳意識は社会が規定した良き妻として、良き母としての理想的女性像をはるかに超えて、自らの良心に従うもので社会にも向いていた。レズリーやパークスのコンダクト・ブックよりも、社会全体にわたる問題を考慮したうえで執筆されたそれとして *Frugal* を見做せる。

A multitude of causes have no doubt tended to increase the evil; but the root of the whole matter is the extravagance of all classes of people! We never shall be prosperous, till we make pride and vanity yield the dictates of honesty and prudence! We never shall be free from embarrassment, until we cease to be ashamed of industry economy! Let women do their share towards reformation—Let their fathers and husbands see them happy without finery; (Child, *Frugal* 6, 下線は引用者) ^[3]

チャイルドは、19世紀半ばに近付くにつれて増加する、浪費や贅沢を問題視しているのだと上に挙げた引用からわかる。レズリーの *Miss Leslie's Behaviour Book* に含まれるホテルで食事をする際のドレスコード (Leslie 120-121) ^[6] や、流行のファッション (Leslie 78-79) ^[6] などといった記述を比較の視点から考慮すると、チャイルドの *Frugal* は道徳を教え説く要素が強く、かつ中流の女性たちに向けられており、儉約が意識された本だといえる。

続いて、*Frugal* で着目したい章は“Reasons for Hard Time”である。チャイルドはこの章で *Frugal* を執筆した時代がハードタイム (“Hard Time”) である理由を説明するために、妻と娘が他の女性よりも見劣る格好をするのを嫌がる夫の挿話 (Child, *Frugal* 109) ^[3] を差し挟む。この夫が“moral dignity”と“moral courage”を持ち合わせておらず、夫は妻と娘の表面的な部分ではなく“neatness”, “good taste”, “attractive manners”を重んじるべきだと主張している。チャイルドが自身の属する時代を“Hard Time”と定義したのは、人びとが外見を着飾ることに熱中するあまり、人間の本質的部分である内面性を軽んじ、贅沢な暮らしや装飾品に価

値を置いているところにある。その例として、“Is knowledge the pearl of price in your estimation?” (Child, *Frugal* 104) ^[3]という問いかけを挙げられる。

Frugal では女性の家庭内での仕事が精神的役割のみならず、生産活動と結び付けられている点も重要だ。19世紀前半にアメリカで経済生産の場が家庭の外へと移り、家庭は寛ぎの場として扱われていたことは本稿の1章でふれた。しかし、*Frugal* には植民地時代にそうであったように、家庭を生産活動の場として捉え、女性たちが実用的な力を身に付けるようにと教え説いた記述が頻出する。例えば、子どもに自分のボンネットを藁で編む方法を教えるように勧め (Child, *Frugal* 3) ^[3]、古くなった衣服をドアマットに再利用する方法 (Child, *Frugal* 13) ^[3]が記されている。これらの記述から、チャイルドが女性たちに実用的なことを教え説こうと意図しているといえる。それは、本稿の4章で考察していくテーマと深く関わる。

4. 独立: 女性に潜在する力を信じて

女性が家事を身に付けることは女性自身の自立や幸福にかかわる、とチャイルドが考えていたとわかる記述が *Frugal* にある。この問題を考察する時に注意すべきなのはチャイルドが自身の属する社会通念をよく留意し、社会規範からの逸脱がおおっぴらにならないようにと注意を払っている点である。当時、女性の自立や社会参加は促されてはいなかった。しかし、チャイルドが女性も国家の繁栄にかかわる存在であると考えていたことは、以下に挙げる引用が重要な裏付けとなる。

There is no subject so much connected with individual happiness and national prosperity as the education of daughters. It is a true, and therefore an odd remark, that the situation and prospects of a country may be justly estimated by character of its women; (Child, *Frugal* 91, 下線は引用者) ^[3]

上述の引用は“Education of Daughters”の冒頭に置かれており、チャイルドが考える女子教育の必要性が端的に述べられている。チャイルドが娘たちの教育ほど個人の幸福と国家の繁栄に深くかかわ

る議題はないと述べている箇所は重要だ。*Frugal* には女子教育に関する挿話がいくつか差し挟まれており、最良の教育こそが女子の幸福にいかにかかわるかを教え説いている。一方、女子教育が国家の繁栄に結び付くという主張について、チャイルドがこれ以上の言及をなにかしらの事情によって、差し控えているかのように解釈できるように、当時の社会における女性の立場が暗黙裡に示されている。

チャイルドの家事教育に関する見解は独自の、娘自身の幸福と家事を結び付けながら、その重要性が説かれている。こうしたテーマにかかわる記述の1つには新婚夫婦の挿話 (Child, *Frugal* 97) ^[3]がある。若くてかわいらしい称賛に価する娘は生活に必要な術を身に着けないまま結婚した。実家に住んでいた頃、この娘は身のまわりの世話を母親に任せていた。結婚後、娘は浪費におぼれ、家事ができずに夫を困らせる。ついに、この夫婦は貧困に陥り、夫は遠方の学校で教職に就き、疲れ果てて帰宅しても自分で夕食をつくらなければいけない事態となる。しかし、最終的に、夫の忍耐と娘自身の夫に抱く愛情によって、家事を身に着ける努力をしようという思いが娘に芽生える。新婚夫婦の挿話におけるチャイルドのねらいは、女性が家事を身に着けることは家族のためのみならず、女性自身の幸福にも結び付くと教え説くことにあるといえよう。

Frugal に挿入されている、年老いた女性 (an old woman) の挿話 (Child, *Frugal* 106-108) ^[3]とミセス (Mrs.) の挿話 (Child, *Frugal* 111-112) ^[3]から、チャイルドが女性たちの人生と家事はどのようにかかわると考えていたのかという問題をより詳しく検討していきたい。ある年老いた女性 (an old woman) は貧しく侘しい暮らしを営む。この女性は病弱な夫と生計を共にし、独立して暮らしている6人の息子と5人の娘をもつ。年老いた女性の息子と娘は母親を気にかけていたが、この老婆は子どもたちから助けを借りようとはしない。自分の身と夫を支えるために痛む足を引きずりながらも、バッグやストッキングを売り歩いて生計を立てている。年老いた女性の暮らしは儉しいものの、高尚な精神が軸にあると *Frugal* で称えられている。年老いた女性は生計を立てるための術を身に着けているだけではなく、他者に依存しない独立した精神をあわせもつ。彼女は、当時の社会で理想と

されていた女性像、換言すると家庭内で夫を支える献身的な妻であるばかりではなく、社会において自力で身を立てていくための能力を持っていることも称賛されている。

あわせて、*Frugal* の最終章“*How to Endure Poverty*”に差し込まれているミセス (Mrs.) の挿話をみていきたい。両親をはやくに失ったミセスは叔父と叔母から聖書に基づく教育を受けた。ミセスは叔父と叔母も亡くし極貧に陥ったが、多くの友人に囲まれながら自分自身の力で立ち直る。しかし、ある日、隣人がミセスの家に火をつけた。ミセスは避難しようと窓から飛び降りて、右腕を切断した上に、右足も使えなくなってしまう。ミセスの友人たちは彼女に多くの施しを与えたが、ミセスは“*genuine independence of a strong-mind*”の持ち主であり、友人たちから与えられた施しを貧しい人たちに差し出して、救貧院でのボランティア活動に携わる。ミセスは、貧困や突然の不幸に襲われても気高い精神を保ち、幸せを取り戻していく。

ミセスの挿話のあとで、怠惰で下品な女性 (the woman) の挿話 (Child, *Frugal* 112-113)^[3]が対照的に差し挟まれている。この女性が父親から受けた教育の根っこには、女は結婚こそが最も重要だという考えがある。女性は父親の教育から自立心を育めなかった。前に挙げた挿話の主人公ミセスと同じくして、女性も両親をはやくに亡くす。しかし、ミセスとは対照的に女性は自活する術も意欲ももたないために困窮した状況から立ち直れず、傲慢な態度で周囲に迷惑をかけて墮落へと陥った。

チャイルドの家事に対する考えを年老いた女性の挿話とミセスの挿話から推し量ると、女性であっても生計を立てるための術を身に着けていれば、社会において独力で生きられること、女性自身の幸福に家事がつながると考えていたという2つのことを導き出せる。年老いた女性とミセスの姿は、セルフメイドマンやセルフライアンスといった精神が根付くアメリカの土壤にふさわしい。

5. おわりに

幼い頃から高等教育を受けたいと強く望んでいたチャイルドにとって、ジェンダー・ロールが明確化し、自らの意見を主張する女性を抑圧する社

会は不満を抱かせるものであったろう。このような社会で、チャイルドは夫に代わって家計を支え、社会を見据えながら、同時代に生きる女性や女子に必要とされるテーマで作品を次々と執筆した。チャイルドが女性に潜在する力に期待を込めて向けた眼差しは、*Frugal* の後に出版された *Little Girl's Own Book* (1847) にもよく表れている。この本の序文には娘をもつ両親に宛てて、“*In this land of precarious fortunes, every girl should learn how to be useful*” (Child, *Little v*)^[8]と記されている。この記述は *Frugal* における女子教育についての主張と重なり合う。チャイルドは *Little Girl's Own Book* でも、女子が不安定な社会で生き抜いていけるよう成長することを願い、彼女たちに生活に必要な実用的術を身に着けるように勧めている。こうした思いから執筆されたこの本は、生活に必要な術を遊びから身に着ける方法が大部分を占めている。フランス語をゲーム感覚で身に着けるクライズ・オブ・パリス (Child, *Little* 9-13)^[8]、身近な素材を用いたバスケットの作り方 (Child, *Little* 104-117)^[8]などが記されている。加えて、幼い頃に人形の洋服を裁縫した経験が、将来的に自分のドレスを縫い繕うことにもつながる (Child, *Little* 70-71)^[8]と述べられているように、女子たちの将来に役立つ記述が多い。

Frugal は、このタイトルが示唆するとおり、儉しい生活を営む主婦のための家事の指南書としての特徴が目立つ。だが、女性にとって家事が自らの身を建てるための手段になると述べられている記述もまた重要だと考えられる。これらの記述は、最終章“*How to Endure Poverty*”に登場する年老いた女性とミセスの姿と結び付く。この二人の女性は、道徳心と自立して生きる力をもっているといえる。

また、女性の家庭内での仕事の見方については時代とともに変化がみられるものの、チャイルドがこの本で意義付けた家事とは、植民地時代と独立戦争下のそれに類似する点も見逃せない。植民地時代は男女共に仕事の間は家を中心としており、女性の家事仕事は生産活動として考えられていた。独立戦争下、針仕事が国の自由と独立に関わっていたように社会と結び付いていた。この2つの時と同じくして、チャイルドは家庭を生産活動の場として捉えているといえよう。しかし、チャイルドは、自身が属す社会では女性が国家や政治にか

かわる議題に加わるのはタブーであると理解しており、そのことを心掛けながら慎重に筆を進めていた。それは、“There is no subject so much connected with individual happiness and national prosperity as the education of daughters” (Child, *Frugal* 91) [3]と述べた後で、娘たちの教育と国家の繁栄の結び付きに関して、なにひとつ言及されていないことが証している。

このように考えていくと、チャイルドが *Frugal* で女性に家事の方法を身に着けるように述べた意図には、女性自身の幸福と独立にもかかわるものがあるとわかる。女子教育に関していうならば、チャイルドは女子が教育を受ける目的を息子や兄弟の家庭教師になることのみを目的とするのではないと考えていたといえる。チャイルドは、女子が教育によって身につけた力は、いざという時に自らの身を守るための術となり、女性たちが幸福に生きるために役立つと考えている。チャイルドが *Frugal* で意図したのは、限られた収入で家の管理を行わなければいけない主婦たちに節約方法を教え説くことにあわせて、女性自身の幸福や自立への指針を掲げることにもある。

引用文献

- [1] 有賀夏紀. アメリカ・フェミニズムの社会史. 勁草書房, 1988.
- [2] Rose, Jane E. “Conduct Books for Women, 1830-1869 A rationale for women’s conduct and domestic role in America.” Hobbs, Catherine et al. *Nineteenth-century Women Learn to Write*. U of Virginia P, 1995, pp. 37-58.
- [3] Child, Lydia Maria Francis. *The American Frugal Housewife: Dedicated to Those who are Not Ashamed of Economy*. Samuel S. & William Wood, 1841.
- [4] Karcher, Carolyn L. *The First Woman in the Republic: A Cultural Biography of Lydia Maria Child*. Duke University Press Books, 1998.
- [5] Parks, Frances. *Domestic Duties or, Instructions to Young Married Ladies, on the Management of Their Households, and the Regulation of Their Conduct in the Various Relations and Duties of Married Life*. Longman, Rees, Orme, Brown & Green, 1828.
- [6] Leslie, Eliza. *Miss Leslie’s Behaviour Book: A Guide and Manual for Ladies as Regards Their Conversation; Manners; Dress; with Full Instructions and Advice in Letter Writing*. T. B. Peterson and Brothers, 1839.
- [7] “Valuable Family Books.” *The North Carolina Standard* 21 Aug. 1839, Image 4. <https://goo.gl/xyQNKH> (accessed 2019-11-19).
- [8] Child, Lydia Maria Francis. *The Little Girl’s Own Book*. R. Martin, 1847.

(受付日：2019年11月18日，受理日：2019年12月3日)



西田 梨紗 (にしだ りさ)
大正大学 博士後期課程

専門はアメリカ文学。現在はヘンリー・D・ソローを中心にアメリカン・ルネサンス研究を行っている。